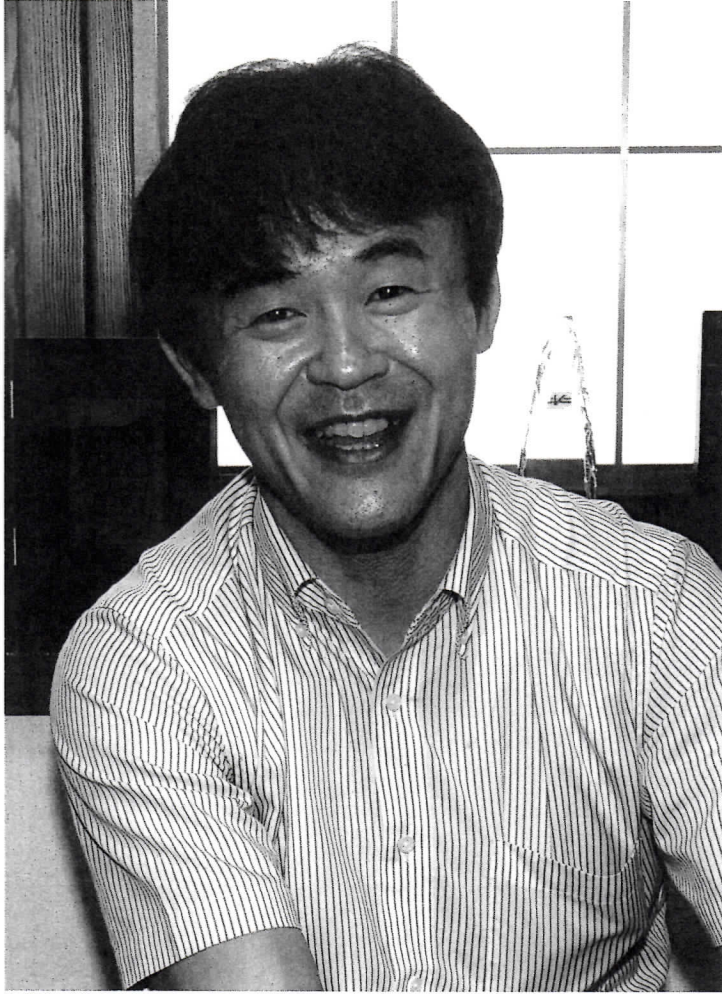


女子レスリング48キロ級の登坂絵莉選手(東新住建、高岡市出身)は、アスリートとしての実力はもちろん、明るい笑顔と気さくな人柄も魅力です。実は、登坂選手の父・修さんも国体で優勝するほどの逸材でした。同じ競技に打ち込んできたからこそ娘を深く理解し、ある時期からは「妥協なき世界女王」に驚嘆の思いを抱いてきました。「父の視点から見た登坂絵莉」とは? レスリングを始めた日からこれまでを振り返っていただきました。



妥協なき女王
登坂の原動力とは?

父・修さんが語る 「リオ五輪への道」

聞き書き・写真 若林 朋子

interview&text&photo by Tomoko Wakabayashi

「絵莉には4歳上に兄がおり、2人を連れて練習を見に行ったのがレスリングとの接点でした。絵莉が9歳のころです。私としては、息子にさせなかった。しかし、興味を抱いたのは娘の方でした。本音を言うとう、女の子に格闘技はさせたくないな。痛く、苦しく、つらいのはよく分かっています。「やりたい」と言った時、「困ったなあ」と思いましたよ。」

「小学生で日本一になろう」

絵莉がレスリングを始めて4カ月後のことです。初の全国大会で初戦敗退し、泣きじゃくりました。私は「初心者だから当たり前」と思っていたので、驚きました。私「そんなに悔しい?」
絵莉「悔しい!」
私「勝ちたかった?」

絵莉「勝ちたかった!」
私「分かった。じゃあ小学生で日本一になろう。表彰台に立つ子は努力しているよ。絵莉も努力すれば可能性はあるよ」

初戦敗退という屈辱的な経験に奮起した絵莉。今思えばあれがスタートだったと思います。そして、今も「負けたくない」という気持ちは、変わっていないと思います。

私とレスリングについて紹介しますと、中学時代は柔道をしていました。絵莉と同じで体が小さく、富山県内では「軽々量級」で1、2番を争う力がありました。しかし、体重は45キロくらいしかありませんでしたので、高校で柔道続けることはあきらめざるを得なかった。そこでレスリングを始めました。

国体では2年生の時に48キロ級グレコローマスタイルで優勝しました。ですが、フリースタイルで戦うインターハイでは優勝できませんでした。2、3年生の時はいずれも決勝に行く前に、小林孝至選手(後のソウル五輪金メダリスト)と対戦し、惜敗しています。

いくつかの大学から誘いが来てくれましたけれど、「学生日本一を目指す」という目標に向かって頑張ろうという気にはなりません。このあたりは、娘と全く違います。

「頑張るなら手伝うよ」

敗北した後、「悔しい、勝ちたい、頑張る」と言っておきながら、何日か経つと悔しかった思いを忘れてしまう選手がほとんどではないでしょうか? 私もそうでした。しかし、絵莉は決意表明した通り、手を抜かずに練習をします。「真面目にやれ」「ちゃんとしろ」などと注意し

